

大倉幕府周辺遺跡群の遺構保存について

鈴木 弘太（文化財課 主事）

はじめに

本稿では大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、660 番 3 先地点（横浜国立大学附属鎌倉小中学校構内））の 5 区 6 b 面の遺構保存について紹介する。本調査成果については、すでに『大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書―雪ノ下三丁目 660 番 3 外 9 筆、660 番 3 先地点―』が刊行されており（斎藤建設 2024）、保存対象の遺構であった 6 b 面については、概要を紹介している（鈴木 2024）。

1. 調査と保存遺構の概要

発掘調査は令和 4 年 2 月から令和 5 年 9 月まで、株式会社斎藤建設（調査担当者：継実氏）により西御門川雨水幹線改修工事に伴い実施された。調査地は横浜国立大学附属鎌倉小中学校構内の一角であり、西御門川は大倉御所の西辺と推定されている（図 1、山村 2009）。調査区は約 640 m²であるが、長さ約 230m、幅 3～4 m と長大なトレンチ調査の様相を呈した。調査では鎌倉時代初期から南北朝時代頃の中世遺構と近世以降の西御門川の流路が発見されている。

本稿の主題となる保存遺構は、5 区 6 面とされた遺構面であり、上下層でそれぞれ 6a 面、6b 面とされている。6a 面では泥岩を突き固めた道路遺構が発見され、その東側には円礫やかかわらが面的に広がったため、これを一時期の生活面とした。確認された道路幅は約 2 m であり、西側は近代の側溝により破壊されていた。その 6a 面から南北道路の東側溝が掘り込まれている。側溝の埋没年代は 13 世紀後半とみられる。

6b 面は東側溝の底面で発見された遺構群である（図 2、3）。南北道路は 6a 面を踏襲している。南北道路の東に並行して、3 条の柱穴の列と 5 穴の大型柱穴が発見されている。この 5 穴の柱穴は、礎板と根石を有するため、上屋を想定できる。道路と並行すること、上屋が想定できること、次に述べるように柵と連結することから、大型の柱穴は門跡と考えられる。また大型の柱穴のうち、真ん中の柱穴は、メガネ状の底面であることから、これは遺構の重複であると考えられる。このことは大型柱穴で構成される門跡にも作り替えが示唆され、4 穴の柱穴と、2 穴の柱穴で構成される 2 時期の門があったことが推定される。

南北道路に並行する 3 条の柱穴列は、柵の 3 時期の作り替えと考えられる。相対的に新しい 2 時期の柱穴列は大型柱穴の前後を通るのに対し、最古の柱穴列は大型柱穴の範囲には確認できない。つまり、最古の柱穴列が大型柱穴と連結すると考えられる。

遺構は、①南北道路と柵と門（柱穴 2 穴の冠木門か）、②南北道路と柵と門（柱穴 4 穴の薬医門か）、③南北道路と柵、④南北道路と柵、⑤南北道路と側溝、といった変遷が想定できる。本稿では積極的に立ち入らないが、4 区同一層位の SX 1 から「建保三年」の紀年銘を有する題箋軸木簡が出土しており、上限年代はここに求めることができる。この題箋軸木簡と出土遺物から、柵と門は、大倉御所（治承四年（1180）～嘉禄元年（1125））の時期の遺構であると推定できる。また発見された位置からは、南北道路は史料にみられる「西大路」である蓋然性が高い。これらのことから鎌倉時代前期の西大路と大倉御所を囲う柵、及び御所の西門（西御門）であると推定している。

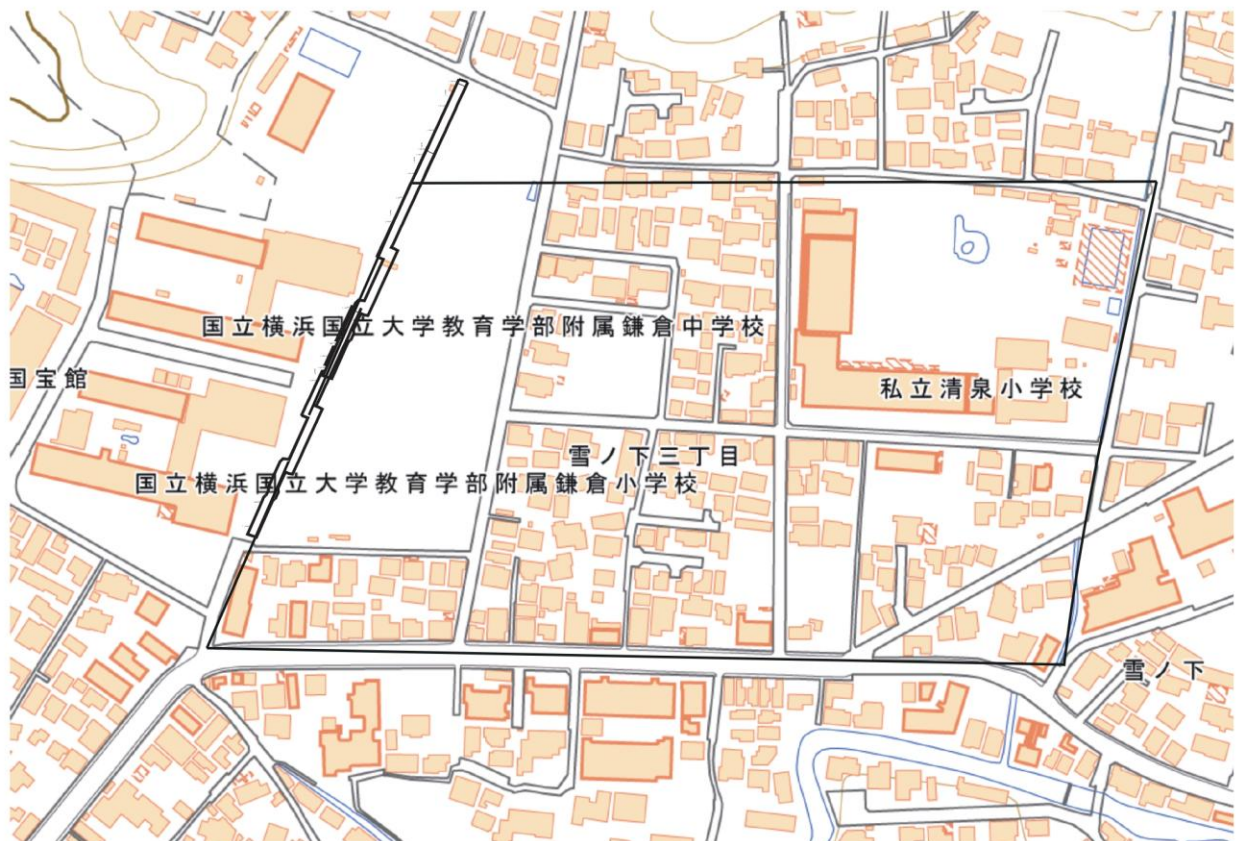


図1 大倉御所の推定範囲推定及び調査範囲（平行四辺形の実線が大倉御所推定範囲）



図2 保存された5区6b面

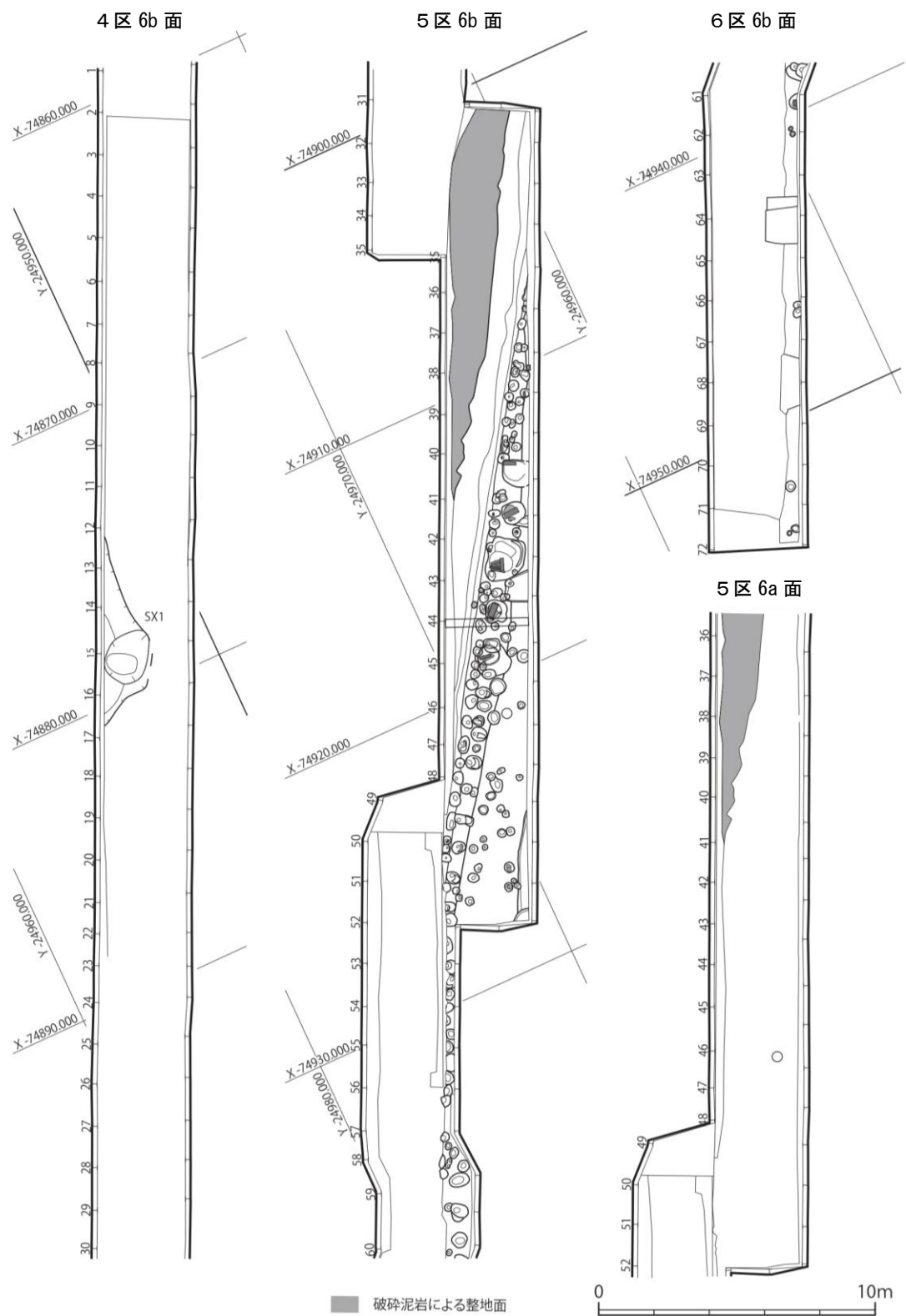
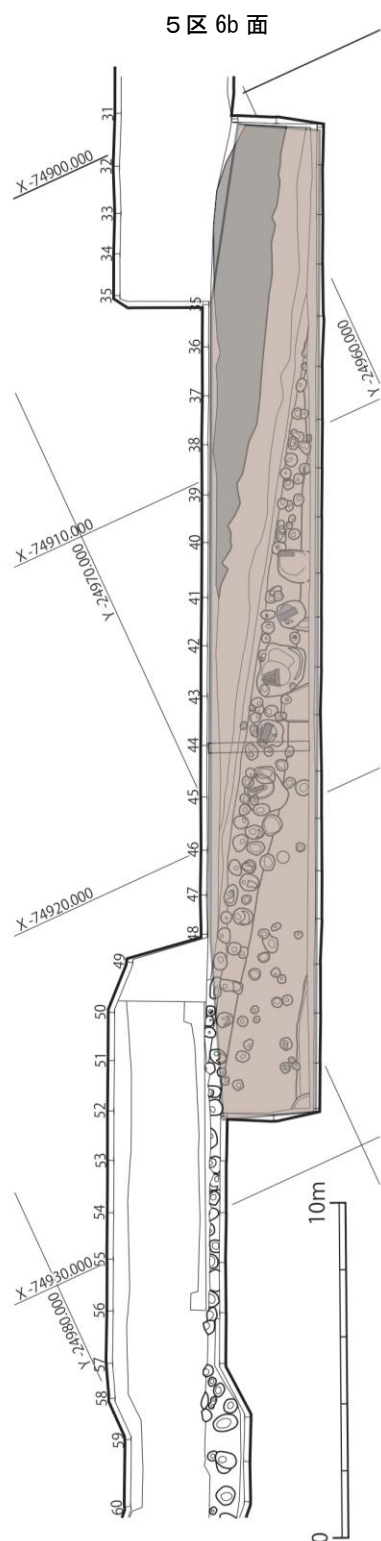


図3 4～6区第6面全測図



スクリーン部分が保存範囲



山砂敷設前



大型柱穴養生状況



山砂敷設後

図4 遺構保存範囲と実施状況

2. 保存の経過と方法

令和5年4月17日に筆者が定期的な現場の進捗確認を行った際に、調査担当者の継氏から進捗説明と遺構解釈についての議論の中で、5区6b面で発見された大型柱穴が門である可能性が浮上した。その直後から、鎌倉市教育委員会教育文化財部文化財課と西御門川雨水幹線改修工事の事業主管課である鎌倉市都市整備部下水道河川課と継続的な内部協議を行い、基本的には設計変更により5区6b面の遺構の現地保存の方向性が確認された。令和5年5月12日には鎌倉市文化財専門委員会の高橋慎一郎委員長(当時、日本中世史・東京大学史料編纂所教授)の現地指導が実施され、大倉御所の西門の遺構である可能性が指摘されたことから、鎌倉市教育委員会文化財課から調査者である株式会社斉藤建設に対して、これ以上の掘削(面の掘り下げ)を行わないよう指導を行った。引き続き、5月24日に佐藤孝雄氏(考古学・慶応義塾大学教授)及び御堂島正氏(考古学・大正大学特任教授)、令和5年6月1日に大野敏氏(建築史・横浜国立大学教授、いずれも鎌倉市文化財専門委員)の現地指導を受けており、幕府関連遺構である可能性が指摘され、遺構保存や記録方法についての指導を受けている。その後、7月までには鎌倉市長をはじめとする市職員や鎌倉市教育委員、鎌倉市議会議員の視察を実施した。また7月8日には本調査では第3回目となる現地説明会を実施し、487名の参加があった。なお、5区6b面の協議や現地指導等のための中断中は、次の6区の調査を優先的に実施している。

6b面の保存範囲は、西大路と目される南北道路、大倉御所を囲う柵、及び西門(西御門)と推定される遺構の範囲96㎡である(図4左)。柱穴には土嚢を充てんし、大型遺構については遺構壁に保護シートを覆った中に土嚢を充てんした。その上に厚さ30cmの山砂を敷設した上で、発生土により埋め戻している(図4右)。調査区の西壁に打設されたH鋼の撤去については、遺構への影響を最小限にとどめるよう配所するよう指導している。

おわりに

重要な遺構を保存することはできたが、工事が進行する中での対応であり、必ずしも十分であったとはいえない点もあろう。緊急調査中の遺構の現地保存という稀有な事例の中で、遺構の保存に尽力いただいた関係各課や株式会社斉藤建設、横浜国立大学附属小中学校、現地説明会に来場いただいた多くの市民の方々には感謝申し上げます。また本来であれば、遺構保存については発掘調査報告書で詳述すべき内容であるが、本稿でその責の一端を塞ぎたい。

参考文献(執筆者五十音順)

斉藤建設 2024『大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書―雪ノ下三丁目660番3外9筆、660番3先地点―』

鈴木弘太 2024「鎌倉市・大倉幕府周辺遺跡群の調査成果」『日本歴史』第920号 吉川弘文館

山村亜希 2009『中世都市の空間構造』吉川弘文館